教職教育とアクティブラーニング
ー「知床原生林伐採」の授業をディベートで行うー

平野　和弘

本報告は、高校の保健の授業におけるアクティブラーニング実践を、本学教職課程、保健体育科教育法を履修する学生たちに追体験させることで、「何を学ぶのか」という問いと「どのように学んだのか」という問いを交差させ、アクティブラーニングの学び方と、学びの質を問うものである。

「知床原生林伐採」の授業は、朝日新聞に掲載された対立する二つの記事を元に、グループを基本に全体議論に導くものである。「知床の原生林に危機」１）と題した自然保護派の意見と、「知床の木は伐れないのか」２）と、伐採一時凍結に意義を唱える記事。同じ新聞の、異なる主張の記事という意外性が動機を誘発し、議論根拠を、同じ土台に向き合わせることで、討論は活発化する。

まず二つの主張を読み込み、伐採に反対か賛成か、各自の意見表明をさせ、反対、賛成へ色違いの付箋紙を配布する。氏名と理由を記入させ、黒板の左右に、意見の強弱で差異をつくらせ、張り出させる。クラス全体の意見を付箋紙の色で、視覚的にみせ、自分の意見の位置を把握し、他者の意見の場所を確認することとなる。その後、意見の近い順に付箋紙を６～７枚にまとめ、グループ分けする。似た意見を集めることで議論を促し、メンバーの交流も図っていく。ファシリテーター、記録係、発表係、資料係などの役割分担をし、グループ内討論を経て、全体討論となっていく。このグループ、全体討論を繰り返すことで、徐々に議論の柱が出現していく。「自然保護」と「生活」または「開発」。どちらが正しいのか、記事を読み込ませ、自ら調べ、他者と意見をすり合わせる中で、当初「自然は大切」と伐採反対が優勢だったものが「伐採対象は老齢過熟木、伐採は森の活性化になる」「林業システムの再構築が必要」など、生活する視点での主張が勢いを増していく。そして討論の落としどころへ向かっていく。以下２０１５年度、授業を受けた学生たちの感想の抜粋である。

「グループで討論をやると、人の意見も参考になるし、自分で発見できなかったことが発見できると思う」「役割分担により、班全体が参加することができ、よい授業づくりになる」「自分の意見に理由をつけるということは、その人なりの考えがあり、しっかり考えさせることができる授業だと思った」「とても楽しかった。悩んで意見を出しあうのは、私自身の考え方を広げることにつながる」「いろいろな人の意見を聞け、そのような見方もあるのか、と聞けて良かった。授業もあっという間に終わった」。

他者との意見を交流させていくというのは、ただ意見を言えばいいということではない。他者の意見をもとに自分の意見をつくりかえ、再度意見を表明し、それを受け取ってくれた他者を認めていく。この繰り返しで、自分たちの「答え」を、他者とともにつくる。環境問題の本質は、結局のところ、私たちが生きているという、そもそもの贖罪が横たわり、でも乗り越えなくてはならない事実と科学がある、という複合的な視野が必要になる。現在の自分の問題を未来の時空間につなげていく。その作業は「単に個々人のための権利ではなく、自然自身や、将来の世代をも代表する権利」という「自然享有権」３）の思想につながっていく。彼らの「優しさや」「正義」や「ヒューマニティーあふれる思い」を、自分たちで再確認、再構築させていく中から、彼らの学びを出発できる可能性を含んでいる。

アクティブラーニングとは、ただ単に自分たちで考え、行動させるのではなく、その筋道をつけ、「ともに」、自分たちの「答え」を見つける授業の環境を整えることを指しているはずである。本講義で、環境問題に関する学びと、その答えを共に出していく必要性を、学生たちはつかんだと確信している。

参考文献

「知床の原生林に危機」本多勝一　朝日新聞　１９８６年9月１日付
「知床の木は切れないのか」大谷健　朝日新聞夕刊１９８６年１１月２０日付
山村恒年「自然享有権について」『知床から出発』　野生保護センター編　１９８８年